

昭和二十五年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通算第十號）  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

# 慈

# 光

第二卷・第一號

## 目

年頭の挨拶……………花田正夫

思想の徹底と建現……………故・近角常觀師

知と行……………中野駿太郎

## 次

眞實救濟と切命……………那須行英



蓮如上人七十九歳の年頭、勤修寺村の道徳が御挨拶にまう出ると「道徳はいくつになるぞ、道徳念佛まうさるべし。」

自力の念佛といふは、念佛おほくまうして、佛にまいらせ、このまうしたる功徳にて、佛のたすけ給はんするやうに思ふて稱うるなり

他力といふは、彌陀たのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるなり。そのうち念佛まうすは、御たすけありたるありがたさありがたさと思ふころをよるこびて、南無阿彌陀佛々々と申すばかりなり。されば他力とは他のちからといふころなり。この一念臨終までとほりて往生するなり」

自力他力の念佛を直截簡明に示されつゝ短刀直入に念佛をお勧め下されている。これが上人の歳旦の御挨拶であつた。

また歳末に上人の御前に御禮にまう出た人々に向わせられて「無益の歳末の禮かな。歳末の禮には信心をとりてすべし」と訓えられている。一年三百六十五日、歳旦から歳末にかけての

常恒不斷の上人の切なる御願ひは「念佛申さるべし、信心とるべし」

の一つに貫ぬかれて一日の寧日もあらせられなかつた。

### 思想の徹底と建現

本稿は昭和六年十一月五日福岡女子専門學校講堂に於て、同地の學生市民は勿論、數年來待ち受けられし九州全体の同朋約二千人を前にせられた御講話であります。信界建現の第十五號から轉載させて頂きました。

この度は女子専門學校内にある佛教青年會及び御有志のお催しではからずも、かくの如く多數の皆様が御來聴下さいましたこの席で私の信仰上のご事情を申し上げ、御清聴を煩わすことは非常な光榮と思つてあります。

回顧すれば昭和二年の暮に於きまして、しかもこの席で皆さまにお話をきいて頂いたことがあります。それより以來恰も滿四年、その間宗憲改正宗教團體法案、僧籍削除等の問題がござりました。其間是非當地にあがつて私の所信をお話するやうにとの御希望もありました私も是非聴いていただきたいと思つて居つたのでありますが、遂に四年間というものはその暇を得ず、その機會を興えられなかつたのであります。然るところこの度女子専門學校佛教青年會の方々は勿論、有志の方々、および教職員の方々あたりからもいろいろと切な仰せもありはからずもお目にかかることを得たのであります

#### 一、

今日は宗教に關する問題に就いて申し上げたいことは種々ありますが、今夜はそれらの事柄を詳しく申し述べるのは止めて、主とし

人生は既に火宅無常である、吾等は既に煩惱具足である、内外共に無明海に沈没し、自他共に衆苦輪に繫縛されて、何一つ頼むべきものもなく、何等の光もない、これが佛のかわてしろし召す人生の實相である。これを矜哀し、これを悲憐し給うて彌陀佛の本願は、十方衆生一人残さず成佛せしめむ」との大志願に立たせられたのである。既に「心冥く識渺なく惡重く障り多き者」を見抜かれての大願であり念佛であります。

古今東西を問はず、よき人の仰せの極みは「たゞ念佛して」であり「彌陀にたすけられまいらすべし」の一つにつきる。これがそのまま西岸上に響く常恒不斷の慈聲である、火焰道を焼き、波浪道を障える者に「我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮することを懼れざれ」の悲音である。

敗戦五度の春を迎え特に運師の御慈懷を拜し、感慨無量なものがあつた。慘怛たる敗戦直後の人心も、食糧の安定と禱和の擡頭に、ようやく落着きを取りもどしたとは言え未解決の難問は隨所に山積し卑屈と積弊、享樂と犯罪は常に交錯して百鬼夜行の相を現じている吾等この大渦中に立つて、愈々常恒不斷の德音一つあつて我が道を拓き、我が閻を破られ、光明界裡に逍遙せしめられるばかりである。

あばら家のこの身このまゝ明けの春  
歳旦をまつおとづれしり念佛かな  
一茶  
一 道

### 故・近角常觀師

て私が、斯く宗教上の問題に就いて色々行動致して居ります處の根底、即ちそれは私の心に抱いて居るところの信念からいろいろ現われて居るのでありますから、その根本となつて居る處のそのものに就いてお聞き願ひたいと思つてあります。すなわち、それは私の信仰が如何なるものか、と云うことを聞いて頂くことになるのであります。

後程お話し申そうと思つてますが、私は今より三十年前、第一回徹教法案の時に、全國的運動をば起しました。その後西洋に三年程参りましたそうして深く考えましたには、日本の宗教問題を解決するには、ただ政治的に行動したり、運動したりすることでは到底、宗底出来るものではない。それは各自の信念によらねばならぬと考へたのであります。即ち私の得たるところの信仰に依つてのみ解決出来るかと考へたのであります。この信仰を社會各部の人に得て貰つたならば、他の區々たることに力を用いずとも、その信仰の力一つで問題は解決出来るかと考へたのであります。

そこで私は明治三十五年歸朝致しまして以來、求道學會、求道會館なるものをつくり、三十年間に互つて、主として都下の學生諸君を初め全國の方々に、私の信仰をきいて頂いたのであります。而して専ら之に力を入れて、爾來は別に社會に對して運動（宗教に關する）らしいことも致しませんでした。然るところ大正十二年頃を初めと致しまして、色々宗教に關する問題が起り出したものでありま



すから遂に私も絶対信仰の立場から、之に對してもを云わねばならぬことになつたのであります。そうしてそれが段々と續いて参りまして近年に於ては、二度も宗教法案が出たのであります。その他宗教内部に於てもいろいろな事件が起つて参つたのであります。

三

私がこの度こちらに参りますに就いての、女子佛教青年會及有志の御希望なり要求というものは何であるかと云うと、恐らく、此の外部に現れたる運動の傾向、若しくは現狀などということにつき聽きたいのでなくして、かくの如く、私の活動を促すところの、信念なるものは、どういふ具合のものであるかということに聽きたいのが希望であると思ひます。もつと進んで云えば、主催者である佛教青年會及有志は勿論のこと、苟も今日思想問題、國家問題、はた國際問題に、就いて考へて居らるる方が、その解決の源は何であるかその源を求めんとせらるるのであらうと思ひます。されば私は申したいのであります。凡ゆる問題を解決するところの源は、それは外ではない、タダ信念の確立にあると云ひ度いのであります。

しからは、その信念は如何にして得られるか。この問題の解決が、私としては三十年、四十年來話して居る問題であります。而して、今日は斯く多人數な集り下さつたのでありますから、之に就いて私の考へをば徹底的にお話申上げ、そうしてこれを諒解して頂きたいと思ひます。しかしこれは非常に難事でありませぬ。又お話するにつきては、私は何等の深い心組も用意も持ちませぬ。されど私の長き三十年間に於て、實驗致しましたところの、生きたる信念なるものが私の方寸のなかにはあるのでありますから、それをタタ思ふがままに、時間の許す限り、お話致したいと思ひるのであります。

ものであります。斯くの如く人生が相對的で、五分五分であるというところに氣がつくと、人生の問題はなかなか解決がむづかしくなるのであります。

それについて、先づ私が如何にして人生は相對的なものであるかということに氣がついたか、覺つたかということをお話したいのであります。

五

それをお話するには、先づ宗派の問題からお話せねばなりません。約三十年前のことでもあります。私共の宗派、即ち大谷派本願寺に改革運動が起つたのであります。明治二十八年、九年の頃に、清澤滿之師と云う方に依つて唱えられた、當時の所謂白川黨の運動であります。私はその運動に参加して、非常な煩悶に陥り、遂に信仰に入つたものであります。私はその動機と経緯とは、それよりこの方、長い三、四十年というものは、常に絶えず世の人々に聽いて頂いて居るのであります。

その時、私は、最初は非常な理想論に立ち、我れ飽く迄善なりとして進んだのであります。が、最後に於て、その善たる、ただ相對的なものであつて、何等絕對的なものでないということに自覺するに於て、非常な煩悶に陥つたのであります。それが私の信仰に入つた大なる動機でありました。このことは皆様が、社會問題、經濟問題、その他百般の問題に直面されたときに、御經驗されることのある心理状態であつて、よく御經驗のある方も居られることと存じます。まづこの問題について私の經驗致しました事柄から告白致して見たいと思ひます。

六

ります。

四

そこで第一番にお話したいことは、私のこの信念が確立したのはどういふ具合であるかという告白であります。これは從來私の話を度々お聴きになり、又著書をお讀みになつた方は充分御承知とは思いますが、そうでない多くの方々のために、繰り返して聽いて頂く必要があると存じます。

一休宗教というものは、いろいろな概念的なものを持つて來たり或は念佛稱えて、タダ有難い有難いの言葉を弄するといふようなことではなくして、實際現實に生活して居る人生——この人生というものに直面して、信仰というものは、生れて來ねばならないということでありませぬ。吾々が人生の問題を考へずして、直ちに宗教を考へるのはそれは恰も紙もなく、カンパスもなくして畫を猫かんとするのと同じであります。即ち宗教のバックは人生であります。でありますから、人生というものは如何なるものであるかということをお話先づ考へねばならぬのであります。

そうしますと、吾々の人生をよく見ると、人間、吾々の生活なるものは、お互に自分自分の考へを絕對的なものとして、取り扱つて居ることを發見するのであります。

たとへば自分が善いと思ふことは、何處までも善なりと考へ、從つて他のすることは惡に考へて居る。そうして自分の善は、何處までも絕對的なものであるかに、考へて居るのであります。しかしこれは錯誤であります。各々善といひ、惡といひのは自分自分の立場からいふて居るのであつて絕對的なものではないのであります。相對的なものであります。すべてがこうであります。即ち五分五分の

私共が現今の宗門、既成宗教を觀ますと、そこに大きな弊害のある事を見るのであります。それらの事を此處で申し上げたくはありますが、現今の宗教界を見る時、そこには到るところに病根があります。信仰が地を拂つて居るのであります。信仰の枯渇と共に、神聖なる可き宗教が、全部物質に支配され全然感化力を失つて、從つてまた、社會が非常な腐敗状態にあることを見出すのであります。今の宗教界が然る如く、當時に於いても同様で、親鸞聖人の云われた信念に從つて、生きて居る宗教家は何處にもない、というように痛感したのであります。そこで斯ういふことではいけない、之を改革すべし、飽くまで腐敗を刷新すべし、といふことは、當時私一人が叫んだことではありません。心あるもののみな叫び、同感した處であります。

明治二十九年、三十年の頃、私は將に大學を出でんとする時でありました。私の先生清澤滿之師が盟主となつて、白川黨を立て全國に呼號されたのであります。此の時は私はまだ學校に居りましたが吾々同志は泣いて先生を促し、是非先生に立つて貰わねばならぬといふことを訴へたのであります。病軀を提げてまで、先生に蹶起して頂き度いことを切願したのであります。私はジツトして居られぬ。従つて書物を讀んで居る譯には行かない。自分が勉強するのにも、研究するのにも、要するに宗教界を刷新しようという精神に外ならない。宗教が腐敗し、衰えてしまわんとして居るときに、便々として勉強して居つて何になる。というわけで遂に私は筆を、抛つて此の改革に一身を投げ出したのであります。そうして凡ゆる苦難をし鬪つたのであります。長い間努力したのであります。がその最後に於て如何なる現象が私の心に起つたか。



私は今も云つたように、宗教界革新のために、自分の身の犠牲になることを希つたのであります。そこには何等名譽も報酬も顧みずただ宗教改革の理想に奮進したのであつたが——皆さまが宗教問題でなしに、凡ゆる百般の問題解決の理想のために献身的努力を致されると同様であります。が、さてその最後に於てはどうなつたか。最初の理想に到達し得たか、どうか、自分はこれ程までにするに拘らず、他の人は一向にさような心を持たない、吾れ聞知せずというやうな態度であります。私が最も正しき主張なりと認めて、一生懸命になつても、他の人は認めてはくれない。そうなる自分自身のことが無駄になる。これでは駄目だ、残念だというやうな心が起つて参つたのであります。そうしてその考えがひどくなつた時には四方八方、世の中なるものが甚だ面白くない。人は實際冷酷なものと思われ、遂に世の中を呪い、人生のすべてに疑いをもつて來たのであります。是は氣をつけて貰いたい問題であります。

八

私の最初の理想といへば、多くの他の理想家が云うように、自らを犠牲にし、名譽も富も捨て、そうして温い心で敵を愛し、どこまでも悪しきものを憐れ、みいかに冷ややかなるもの自分の温き心で溶かして見せる、敵とも手を握り合う、それまでやり遂げようというのが私の理想であつたのであります。このことは私ばかりではない。苟も精神運動をなす程の方はすべて同じやうな考えを以て、進まれて居ると思つてあります。トルストイも云つて居るやうに「人生は無抵抗主義を以て、平和を實現する」と。當時私は總てこの考えでやつて居つたのであります。

曾ては本願寺の腐敗のみならず、宗教界の腐敗をなげき、革正を叫んだ自分が、實は自分自身が腐敗して居つたのである。自分自身が本當でない癖して、人のことをあれこれ云うたは、大なる間違ひであつた。恥しいことであつたそれにも拘らず人は私を買いかぶつて大層立派なものと思つて居るのは、是は錯誤だ、買いかぶりである——勿論それは人が悪いのでない、自分が全部悪いのだ。申譯ないことである——斯くて私は非常な苦悶に陥つたのであります。

九

今日各方面に於て、社會問題或は思想問題、それ等にあずかる人達には或は自分は正しいものである。絶對的なものであると考へて、恰も私が宗教改革を主張した時の心持と、同じにあるのではなからうか。殊に今の若い人達、前途ある青年達が深く考へる處なくしてつまらぬ運動に身を投じて居るは、結局に於て私と同じやうな道行きに終るであらうと思つてあります。斯ういうやうに自分のすることは正しい、善でをると信じて、他からはそれを、正しく、善であるとは受け入れてくれない。却つて他は自分で自分を正しい、と考へて居るのであります。すべてがそうなつて居るのであります。世の中のことは善とか悪とかが絶對的のものでなくして、五分五分であつて見れば、それは人生のすべての問題を解決するとか、徹底すると云ふことは、決して出來ないことになつて参ります。是は人生の問題の解決の上に於て根本的に考へねばならないことであると思つてあります。

一〇

茲に、私が今回お伺いしました爲に、態々用意して下された刷物がありますから、これによつて話して見ましよう。即ちこの中に聖

ところが、先程も云つたやうに、それが最後に至つて見れば實際は敵を愛して居るのでなく、呪つて居たのであります。

人を恨んで居たのであります。

自分の思惑が無視されて居ることを残念がつて居たのであります。犠牲とは自分が闇から闇に葬られても、更に不足を云わぬのが犠牲であります。が最後に至つて口から迸り出て來たものは不平であります、残念がりであります。自分が認められないのを、残念がつて居るのであります。

そういうことに氣がついて來たのであります。そうして遂に失望するに至つたのであります。絶對的なものとして考へて居たものが然るに何ぞや、斯ういうやうな、汚い心を持つて居た、斯ういうやうな名譽心を持つて居つた、斯ういうやうな地獄の考えをもつて居つたのであります。

今日まで、我こそ正しきものなりと自負して居たが、いざ振りかえつて見れば、是は一つの空想に過ぎなかつたのであつた、矢張り自分は自分の主張が認められることを期待して居たのであつた。やはり名譽が欲しい、そうしてそれ等が與えられることを期待して居たのである。

私はそこまで考へ至つたとき私の心は實に安らかでなかつたのであります。宗教家などというものは、口には殊勝なことを云つていゝるが、直接、物質、名譽というやうなものとは性質の違つた——精神的に吾々は正しいものであることを認めて貰い度いと云うやうな一種違つた名譽心というもの——斯ういう卑劣な考えを持つて居るということ考へたのであります。實に悲しむべきことである。恥しいことである。申し譯ないことである。

徳太子十七靈法の文が出て居るのであります。

十に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ。人皆心あり。心各執るところあり。彼是なるときは我非なり。我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理誰か能く定む可けん。相共に賢愚なること端なきが如し。是を以て彼人瞋るを離還て我失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従て同じく譽へ

さすが聖徳太子であらせられます。先程から私がいろいろなことを申し上げましたが、それはこの一言にして盡きて居るのであります。

斯くの如く人生なるものは五分五分であります。五分五分である以上、そこには解決と徹底とはありませぬ、即ち今申されてあるやうに我れ是彼れ非、彼は又われ是かれ非と、互に相對對立にて、そこにはすべての問題の解決はもたらせられないのであります。それは小にしては家庭の問題、大にしては國家の問題、國際の問題、凡ゆる社會の問題、みなこれらであります。して見ると如何なる大きな問題、たとえば國家、國際の問題、社會問題等にしても、それを解決するという根本をつきつめれば、小なる家庭問題、個人の問題も同じことになつてしまふのであります。さればその根本の問題さえ解決すれば、凡ゆる百般の問題は譯なく解決出來るのであります。

次にはまた、

一に曰く、和を以て貴しと爲す、忤ふなきを宗となす。人皆黨あり。亦違れる者少し。是を以て、或は君父に順ならず、乍ち隣里に違ふ。然るに上和ぎ、下睦びて、事を論ずるに諧ふと



きは、<sup>シリオリツカ</sup>事理自ら通じて、何事か成らざらん。

人生はこの通りであります。何人も平和を欲しないものはない、世界の平和國家の平和、人間たるものみな和を欲するのであります併し相對五分五分の心では、そこに平和はない、ただ争いがあるばかりである。黨を立てるといふことは、黨とは多人數によつて對立することであり、勿論一人一人相對立して力んで居るのも黨であります。そういう黨派根性では仕方がない。それでは眞の平和、世界平和といふようなことは望めないであります。

一一

然らば如何にして之を解決するか。この五分五分、相對の問題を解決すれば、人生の凡ゆる問題は解決するのであります。エヂソンが電氣や電話や、ラジオなどを彼の一つの小さい研究所から發明したように、小さい根本の五分五分を解決すれば凡ゆるものは解決されるのであります。すればこの五分五分をわれわれ内面の研究所に於て解決する工夫をしなければならぬ。そうして若し之を解決し得たならば、人類の幸福、國家の平和、世界の平和も持ち來し得るのであります。

物理学のアインシュタイン博士が物質界に相對性原理を主張したように、吾々精神界に於てもかくの如き相對性原理が成り立つて居るのであります。而して精神界に於ても斯く何處迄も相對性である以上そのまま行つては何處まで行つても解決の出來ようはないのであります。さればこの我々の相對性をなす——もう少し實驗的に云うならば吾々の五分五分が悪いと覺つたならば、その五分五分をやめて、よくすることさえ出來ればよいのであります。即ち悪いところさえわかれば、正しい道に還ればよいわけであり、が先程云つ

到底救わるべき道はないと。——  
即ち、外のものに對して打ち解けたい、外のものと争わないようにしたい、愛したい、無抵抗にしたいと様々なことを思ひましたけれども、結局それは不可能なことであることを知るに至つたのでありますと云つてこれでは人間は破滅である。どうかしてここを救われねばならぬ。それにはどうすればよいか。

十三

終に最後に私の思ひましたには、もう自分は如何にしても五分五分の心が止められない、しようがない。誰か一人自分がこれ程まで思つても止められない、それは無理ない、可哀想と、そこを見てくれ、同情して呉れる一人の親友はあるまいか。私は五分五分は止まぬの故誰に向つてもこの性を出す、然るに出せば出す丈、その性の止まぬことを自分は可哀想に思ふのだと水を隔てぬ太陽のような温かさを以つて、それ丈いよいよ私を温め溶して呉れる、偉大なる同情者はあるまいか。そういう友人はたつた一人で十分である。何人も要らない。一人で結構であると。普通はどんな親しい友人と雖も、九分九厘迄は同情し、理解してくれるが、最後に冷たい私のどん底を出せば、屹度呆れて逃げてしまふにきまつて居る。それではいけない。私がどれ程冷たいものをぶち出そうと、その冷たいのを哀みて、最後の最後まで同情の温き手を差し延べて呉れる。本當の生きた人格ある同情者に出會いたい。そういう眞實の友人に出會つたなら、四方八方如何に冷たい氷に圍まれて居ろうとも、私の心は一遍で、温く溶かされてしまつて頭が下ろうに。かくの如き偉大なる人格ある人はいないものかと、私は遂にそういうことを考へたのであります。

たように、本來自分が正しいことをしていると思つて居つた、それが相對五分五分であつた。自分が是で、他が非だと信じて居つた、それが相對五分五分であつたのであるから、この度はそれをよくしたと考へれば、それがまた次の相對五分五分となつて、斯くして茲で如何にも解決の出來ようがなくなつてしまふのであります。

一二

そこで私が考へましたに、どうかしてこの相對的なものを絕對的なものにせねばならぬのであるが、果してそれが出來るか、どうか。  
よくよく考へて見ると、私自身の中にも前申すが如くもともと絕對的なものを持つて、他の相對的なものを同化せんとする心持はあつたのであります。即ち外の人が冷やかなところがあるうとも、その冷やかさを、私の温き心を以て温くする。外の人の心を溶かしてしまふ、という考へを持つていたのであります。然るにその私が反對に、世間の冷き氷に出遭つてみたら、反對に感化せられ、冷くせられ、終に自分で温いと思つて居つた私の心が凍えさせられてしまつて却つて、私が冷めたい氷そのものになつてしまつたのであります。そうして既に冷たい氷になつてしまつた以上、もう到底他の人の冷たい心を溶かすといふことは出來ないのみならず、冷たい氷は他の人からいやがられ呆れられ、遂には世を呪ひ人を恨み、人を悪い方に引き入れる恐ろしき心になつてしまつたのであります。

斯くの如き私はもう絕對に温い心を以て人を同化するなどとは思ひもよらず、却つてそのような恐ろしき心を以て人に對し、世に對し益々冷たい方へ引き入れようとするばかりである。で私は最後に思ひましたに、もう私が斯くの如く五分五分の心であつて見れば、

そうして最後に豈計らんや、私は長い間探していたお方に気がついたのであります。そのお方こそ佛でございましたのであります。大慈大悲の佛であられたのであります。慈悲の塊であられる佛でございましたのであります。佛はどんな冷やかな者であらうとも、どのような大悪、極悪の者であらうとも、もともとその極悪冷やかさが可哀想という大慈大悲を以て、飽く迄その者に隔てなき温かさをもつて向つて下された眞實であられたのであります。その廣大な佛のましますことを、今日まで気がつかなくつたといふは、實に勿体ない話であります。私はこの御佛を知ることによつて、長い間の氷のような冷やかな心の底から勃然として計り知れない有難い感謝の念佛が湧き出たのであります。

吾々はこの無限の大慈大悲に抱かれて、心の惱み、心の氷を溶かされねばならぬのであります。  
この絕對大慈悲の御恵みに照らされて、人間の吾々の五分五分の心の如何に罪深く穢間しきものであるかを知らねばならぬのであります。即ち私どもが如何に抵抗しようが、どれほど冷くしようが、何の差別もなく、太陽がすべて照らすが如き廣大無邊の大慈悲に出會えば、如何な五分五分の吾々もそのお慈悲の深きに喜悅して、おのずから五分五分の心は打ち砕かれ、だに佛をおがみ奉るばかりになるのであります。

併し往々世の中に於て、多くの人は、佛様を拜む時は有難うございませと云う。それは結構であります。直ぐ他の事を考へる時既又もとの五分五分に歸る信仰が多いのであります。たとえば寺では教を聞いて居る時は有難うございませと云う。そうして家庭に歸ればいるいと相争う。勝手なことを云う。そうして佛様有難うござ



さいますと云う。これは佛は有難いが他は有難くないというもののこれは一種の相對信仰であつて、佛の絶對の大慈悲が徹底して、絶對的に佛に頭の下つたものではありませぬ。それでは眞に救われたものではないことは勿論であります。

十四

斯くの如く、佛の御慈悲は絶對であります。この佛にあらざるは世の中は救われない。人類は救われないのであります。而してその絶對の佛は唯一つであります。それと同時に宗教も亦一つということになるのであります。

ここに於いて聖徳太子の十七の靈法に堂々と示されたは、佛が如何に立派なものであるかということでありませぬ。

二曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは佛、法、僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり、何れの世、何れの人か是、法を貴ぶに非らん。人尤悪なるは鮮し、能く教うれば之に従う。其れ三宝に歸せずんば、何を以てか托れるを直せん

佛法とは四生の終歸、萬國の極宗であります。人類許りではない、眞に生きとし生けるものは、皆この佛の恵みに依らねば救われないのであります。生きとし生けるものは勿論、あらゆる國といふ國は、この絶對無限の佛の大慈悲の下に身をよこたえねばならぬのであります。何れの人と雖もこの法を尊ぶに非れば、地に東西の別ありと雖も救わられるべくもないのであります。世の中の人がこの廣大なる恵みを自ら受けざるために、いろいろ争ひ、苦しみ黨派の問題を起して居るのであります。

一五

私は第一回山縣内閣當時の宗教法案問題が終つて後に、三年間程

ります。

然らば東洋人は過去に於て、この絶對を持つて居り、この絶對に育つて居るから、東洋人には五分五分は少いかと云うと少いのが、當然であります。残念ながらそうではない。私は思うのであります。聖徳太子が萬國の極宗と仰せられ得る尊い佛法僧の力を持つて居りながら光をば、日本國內にすら未だ十分明らかにする能わず、況んや世界の舞臺に於いて之を持ち出すことも出来ないといふとは頗る残念なこと、云わざるを得ないのであります。

一六

私はつねにお話するのであります。皆様も御存じのこと、思いますが、嵯拾山の話であります。

自分の親が年をとつて何の役にも立たないからといふので、不孝な子供が年寄つた親を籠に乗せ、奥山に捨てに行つたという話であります。その登つて行く道すがら、親は籠の中から手を出して草を結び、杖を折、り頻りに道しるべを作つて行つた。不孝な息子はそれを見てつぎ親は山から又戻つて来るつもりと見ると思ひせ、ら笑いながらあとから、あとからそれをこわして行つたというのであります。そうしてとうとう山奥に着いて、子供は親を籠から放り出して歸ろうとすると、親は子供の袖をとらえ、「お前はもう歸るか、もう會わんぞ、身体を大事にせよ。今來る道すがら、お前が道に迷おうかと案じて草を結んで道しるべをしておいてやつたら、それを頼りに間違わないように歸れ」と。

子供はその親の一言に接するなり、どう思つたか。さてはそうであつたか、あれは親が自分の歸る道しるべと思つていたに、親捨ての自分を迷わせまいための親の道しるべであつたか。今までは親は

西洋に行つて居りました。余り細いことは視察することは出来ませんでした。併し西洋の百般の問題が現れて居るのを見るに、西洋の文化は鬭争の世界であると見て來たのであります。飽くまで五分五分の世界であります。その五分五分は彼等の經濟上、政治上の問題に現れて居ります。國際上の問題でもそうでありませぬ。彼等の五分五分は東洋人の到底考えられない程の深きものがあると感じたのであります。——勿論西洋許りが五分五分で東洋はそうではないとは云えませんが——兎に角國家の問題、社會問題、その他家庭の問題等に於いても、彼地では強く五分五分が現われて居ると感じたのであります。私は決して西洋の宗教を悪くいうものではないと云えませんが、或は社會施設等は西洋の宗教は實に至れり盡せりでありませぬ。そういうところは吾等佛敎の到底及ばざるところであります。併し今申した、人生としての根本義、人類としての平和の源即ち吾々の相對五分五分の心を融かして、眞實絶對安心の境まで導くということは果して西洋の宗教で解決することが出来るかどうか。若し解決する力があるならば西洋の社會はもつと平和の氣が現れて居つて然るべきものと考へるのであります。

私共が西洋に居りました時に西洋では既に社會問題——社會主義思想問題が旺んに唱えられて居りました。又國際關係も切迫して居りました。私共が日本へ歸つた後、是等西洋の思想が國際間の争鬭となり遂に世界大戰となるまで五分五分の思想が現われて参り、遂に社會問題經濟問題を起し、或は勞働問題を起し——遂に西洋の思想界の鬭争になつて來たといふことは、その當時私が西洋の宗教に於いては、この相對問題を解決するには、甚だ力薄いといふことを考へたのも、決して偶然ではなかつたといふことを思つたのであ

有り難いもので子供に捨てられながら不足も云わず、親は黙つて捨てられて下さる位に横着考へていたのが申しわけない。さてはそれ程迄に親不孝の自分を思つて下されて、それを何處までも捨てざる思いがけないお心かと、こゝに初めて親心の程が徹底し、地にひれ伏し今までの不孝の罪を詫び、それより家につれ歸つて、一代孝養を盡したといふ話があります。

即ちこの意外なる親の心、この深い慈悲心が佛の大慈大悲であります。而して一度この親心の深さを知らざると、如何なる親捨ての不孝者も、その慈悲の深きにびつくりして、地に手をついて謝り果てずには居られぬ。佛のお慈悲はそれ迄に温めとろかし、満足せしめずには措かぬのであります。而してこれ實に人生秩序の根本となる處のものであります。

一七

私は御承知頂く如くこの數年來、大谷派本願寺革新を主張して、本願寺當局と鬭つて居るものであります。それは本願寺當局者は大谷派の宗憲、家憲に根本的に變革を加ふる陰謀を逞しくしたのみならず、一昨年前法主の僧籍を褫奪して親鸞聖人以來の傳燈相承の宗体を破り、子として師父を追い、弟として兄を追ひだし、弟子として師匠を放逐したといふ、秩序破壞を敢行し、何等恥づる處を知らぬのであります。私はそれに絶對反對して、一日も早き秩序克復を叫んで居るのであります。幸にして私の主張は朝野を擧げて賛成して下された。大岡政友會總裁を初め、當縣選出の中野、山崎の代議士の如きも私の主張に賛成して下されたのであります。私は全國の同志に訴え、文部省に訴願を出して頂いた。その節は故濱口首相如きも直接私に面會して下されて、「之は自分個人としての意見



であるが、當然文部省は本願寺に向つて取消を命ずべきで、然かすれば本願寺當局は當然引退辭職すべきだ」と云われた位であります。特に故山川健次郎男の如きは、最初よりこの問題に就いて、非常に御心配下されたのであります。斯く苟も本願寺内に於いて、嵯捨山以上のことが行われているということは、以てその信仰が如何に徹底して居らないか、察するに余りあるのであります。

## 知と行

……廻心と云うこと……

知と行との關係は、昔から云いふるされたことであるが、こゝ一つが本當にわかれば、本當に救われたことになる。まことに肝腎なことであるから、私のささやかな体験を通じて、少しく申させて貰ふことにする。

「歎異抄」の第十六章に、一向「専修のひとにおいては、廻心といふこと、ただひとたびあるべし」阿陀佛の慈悲願一つに生きる人においては、心の方向を轉換させるといふことは、ただ一度あるだけである。「その廻心は、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまわりて」その心の轉換といふのは、平素如來のお慈悲を知らなかつた人が、彌陀の智慧を賜り、ここに夜を明けさせて

拂わればならぬことを自覺して、三十四年間常にこの種の主張を続けられて居るのであります。之が宗教の問題に對する常に變らざる私の態度であります。

實はこの問題は今日申上げる積りではなかつたのであります。ただ今日信仰の問題を説くに當つて、唯南無阿彌陀佛々々と念佛を唱えて有難がつて居ることが信仰でない。眞實の信仰は必ず實人生に於いて、その建現が起つて來ねばならぬのである。而して眞の信仰に徹底の結果は、必ず人生の秩序となつて現れて來るものであることを言ひ度かつたから、つい口に出してしまつたのであります。

長らく御清聴を煩わしたことを深く感謝致します。

中野 駿太郎

頂いて、「日ごろのころにては、往生かなうべからずとおもいて」なるほど、今まで考えていたような自力我慢の心では、淨土へまいらせて頂くことはできないと思つて、「もとのころをひきかえて」今までの自力我慢の心を方向轉換せしめて、「本願をたのみまいらするをこそ」如來の本願一つをたのむようになったのを、「廻心とはもうしそらえ」心の方向轉換と申すのである。

こゝでいぢるらしいことは、彌陀の智慧をたまわるといふことである。信仰といふことは、換言すればこの彌陀の智慧を賜ることです。つまり今までの凡夫の心の上に別のものが加つて、そのために凡夫の心に一大變化が起ることを云うのである。

こゝを近角先生はよく、にこつた水のはいつて居るコップの中に無限に清い水をそそげば、遂には清い水になつてしまふという譬えをあげてお話し下されたが、その譬えのように、彌陀の智慧を賜ることによつて、客觀的に見て凡夫の心が變る、これが廻心であり信仰の徹底である。心が迷ひの境界より悟りの境界に、凡夫の境界より佛の境界に移住するといふことが、こゝに起つてくる。

信と知と行

このように心が變つた、これが知である。それで問題は知と行との關係となる。もつとも眞宗において行といふのは、これはどなたも御承知のように、お念佛を唱えることを意味して居る。しかしこゝでいふお念佛を唱えるといふことは、勿論ただ空に、口でお念佛を唱えることではなくて、佛のお慈悲がこちらの心に到り届いて、「ああ有難い」となつて、その感謝の上から、御恩報謝の上から唱えるお念佛であり、したがつてそれは信と離れたものではない。

言うまでもなく行を「ぎよう」と讀むが、この行と信との關係は學問的には随分むずかしく輪じられるところであり、また信仰上からも最も大切なことである。「行信一念」とか「行信不離」とか言うて、宗義上重要な名目の一つとなつて居るが、こゝではそういう學問的なことからは離れて、事實の上に立脚して輪じようとするのである。

知と行とを論じようとする、どうしても今いふた信といふことが問題となる。それゆゑ眞宗の上からは、知と行というよりも、行と信という方が親しみやすいのであり、また普通なのであるが、それだけに耳なれてしまつて、讀む方も書く方も、空廻りしてしまふきらいがある。それでこゝには、世間一般にわかりよくするために

知と行という題にしたのであるが、こゝでいふ知と信とは別のものではなくて、一つのものである。さきあげた「彌陀の智慧をたまわりて」が信であるから、知と信と相違するはずはない。

しかし世間で信心とか信仰とかいふと、觀音様を信じるとか、不動様を信じるとか、さらに聖天様だお稻荷様だなりと、はては新興宗教などになると、いろいろな信仰、信心といふものがあることになる。それらは多くは一方的に、こちらで心を神佛に運ぶことを意味して居る。もちろん眞宗の信仰はそういう意味でないことはわかっているが、それでも、

六阿彌陀殿のうわさのすてどこ

というふうなこともあつて、信と行とは兎角はなればなれになりやすい。

### 信仰生活の内容

それでこゝに端的に言つてしまえば、私の言いたい行は、勿論ほんとうの意味でのお念佛はその中に含まれて居るのであるが、世間一般に言う行爲行、動という意味にとつて申すのである。ソクラテスは「知徳合一」言ひ、王陽明は「知行合一」と言つたが、その意味で言うのであつて、眞の智慧があれば、極端に言えば、努力感なしに、自然に正しい行爲ができるようになる。正しい行爲をせずにはいられなくなるという、そのところを述べたいのである。

近角先生の著された「信仰之餘瀝」の十三章の題は、「生きんが爲に働くべからず、働かんが爲に生くべし」というのであつた。近角先生の信者の淺井さんは、このお言葉をよくこぼれて、先生にそれを書いて頂いて、額にかけておられた。かつては早稲田のお宅



でそれを拜見したことがあつたが、まことによいお言葉である。しかし世間の多くの人は、生きんが爲に働らいているのではなからうか。そしてここに心の基盤をおくとき、この世は苦の娑婆となる。けれども、この苦の娑婆をあわれんで下さる佛のお慈悲に気づかせて頂いて、この苦の娑婆から離れて、佛の慈悲のふところの中に引きとられる、これが信仰であつて、一度そうなつてみれば、今度はこの喜びをわかつべく、また佛のお心のこの世に現われるようにと、働かずはいられなくなる。すなわち働かんが爲に生きること

## 眞實救済の勅命

近角常觀先生は私の往生の大善知識である。先生のお言葉こそそのにとつて阿彌陀佛よりの直接の勅命である。

た、一度しかこの地上でお会い出来なかつたのであるが、先生私み心は何時何處でも私の心の中に生きて私の力となり私の生命となつて下さつて居る。若し近角先生にお会いすることが出来なかつたとしたら私は永遠に迷う哀れな身である。

善知識にあふこともをしうることもまたかたしよくきくこともかたければ 信ずることはなほかたし

忘れもしない、私が自分こそ安心立命していると自認して傳導していた時分の事である。先生の御縁にて入信して居られし今は故人北野龍容師の説法を聴聞した時、私の信仰がぐらつき、自信建立の信は一たまりもなく崩壊してしまつた。

自己の生命である信仰が崩壊した刹那より私は千尋の谷底へつき

なる、これが先に言つた「廻心」である。かくて心の基盤が迷いの境界より悟りの境界に移行すれば、そこにおのずから知がひらけてくる、否その悟りの境界が知の世界なので、その知から今言つた行がおのずから出てくることになるのである。ここに知と行との密接不離の關係がある。

この境地を保持してゆくこと、それが信仰生活である。今はただ知と行との輪郭を述べただけであるが、次にはその内容について述べてみたいと思う。

## 那須行英

落された様な苦しみ胸におしよせて来た。無信にして人に信をとれよとすゝむるは運如上人が「我は物を持たずして人に物をとらすべきといふ子の心なり、人承引あるべからず」と仰せられている。

自信なくしての教人信は 取引であり精神的詐欺行爲である。もはや僧侶としての資格なきものである。今後如何に生きて行くべきか、前途希望もなく人生の意義も分らず全く生ける屍となつた。今はじつとしては居られない。北野師、那須野一乘氏等、近角先生の御導きを受けられた体験者に泣く泣く聴聞した。しかし、しぶとい私は落付けない。苦悶の末、北野氏に紹介状を頂いて家内に苦哀を打ち明け東京の近角先生を訪ねたのであつた。驛に下車して尋ねて求道會館にたどりつきやつと日曜講話を拜聴する事が出来た。

先生は御次男の方にたすけられて演壇にお上りになつた。私は先生のお姿を見るなり、その尊容よりあたゝかいものにふれてか涙が

はうりおちるのであつた。

先生は沁々と佛陀のやるせなき點をお説き下さつた。今の私の心のこつているのは幾度も幾度も「どこどこまでもお見捨てなきお慈悲である」と仰せられたお言葉である。しかし私は徹底して安心する事は出来なかつた。講話後紹介状を通じて直接先生にお会い致し自分の胸中を隠らず打ち明けた。丁度先生の御長男文常様が盧山にて戦死されて間もない頃であつた。

先生は私に「私も同じ様に悩んでいるのだ。可愛い長男の戦死があきらめられぬ。やはりあれが生きていてくれたらよかつたと思う愚痴な事ながらそれを繰り返して思う。あきらめようと思うがあきらめられぬ。この様な私をどこどこまでもあはれみ給うてお見捨て下さらぬが如來様である。君の様に信仰がやぶれて悲しみなげきてどうにかして安心したい信仰が得たい、ともがいてみても自分でどうしてみようもない。その心を可哀そうに思召して心配するな、見捨てはせぬぞと、どこどこまでも君の心を同情しお見捨て下さらぬのである」と尊々とお説き下さつたのである。

その時の心は何か軽くなつたように思つたが歸つてしばらくすれば剛情我慢の私は尙自力のはからいやまず、十年ばかり心の底に先生の事を思いつゝ徹底せぬまゝ過していた。全く横着者である。

ところが一昨年私は肋膜炎を病み醫師にも恢復をあやふまれた程であつたが、さいわいにも全快をした。病床にてこんな事を考えた。「今年四十才の私は不惑である。明年こそ新しい人生のスタートを切るのだ。自由人として眞の宗教生活を始めるのだ」と。

全快後昨年第二の故郷である西宮に出動致し文化學院の經營をはじめ日曜學校や宗教講座を開いた。先生の御著書「人生と信仰」を

身をはなす事なく幾度も幾度も繰り返して讀んだ。十月の或る日、十年前先生におきゝした先生の御説法が私の心によみがえつて来た。そとは「いかなともしてみようのないものをどこどこでもお見捨て下さらぬお慈悲である」のお辭であつた。之即ち私にとつて眞實救済の勅命であつた。その刹那の疑團一擧に氷解せられて大悲のみ胸に一切をおまかせ申したのである。あ、曠劫以來大悲の御胸をいかばかり頼まし奉りし事であらう。しかし今は親様がいかばかりお喜び下さつて居る事であらう。

あゝ私は久遠の親に抱かれた赤兒である。いよいよ先生の著書を讀いたして居ります。今は先生の著書の一つ一つのお言葉が身に味沁みて有難くうなづけます。

昨年十一月廿九日父が往生して以來田舎の自坊に歸り山の中の人と共に慈悲を語り合つてくらして居りますが日々の私の心の姿は相変らず煩悩すくめで、名利の大山に迷返し愛欲の廣海に沈没して居ります。お恥しい事でありませぬ。

「しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きわれらがためなりけりと知られていよゝたのもしくおほゆるなり」の祖聖のお言葉を偲ぶと同時に「どうしてみようもない者をどこどこでもお見捨て下さらぬお慈悲である」と仰せられし近角先生のお言葉が私を今現に生かして下さつて居るのであります。



# あとがき

先づ新春を祝ひ奉ります。

本誌も昨年四月に創刊以來、皆々様の御援助を頂いて第二巻第一号を八百五十部發送させて頂きました。編集の不備、御執筆下された方々への御無禮の點も多く慊愧に堪えぬ次第であります。純信仰誌としての特長は飽まで守りつゝ、けて参ります。又御投稿も多いのであります。紙數其の他の關係もありまして採否は編集手に御一任をいたします。



△「思想の徹底と建現」は近角常觀先生の九州での御講話であります。信界建現で一度有讀し、其後心に深く刻まれて忘れ得ない出来ぬ金言でありました。年頭に掲載させて頂き皆様の御味讀を乞う次第であります。不徹底な思想に或は生命を浪費し或は厭世に墮し或は享樂に溺れるのは如何にも残念なことであるが、先生の金によつて眞實の光明に浴せられて、草提荷夫人の如く廓然大悟せられんことを念じてやみません。

如來聖人の玄意を深く体得せられた斯の如き徳育は地上の何處にも聞き得られない御慈訓であります。勝覺夫人が「我れ佛の音聲をきけり微妙にして稀有なり、世間に

未だあらざるなり」と嘆じて居るが私は本稿にその音聲を拜聴出来るのであります。

△「知と行」は中野先生が本誌を特に御心におかけ下さつて御投稿いただき、全にみ透る念佛がやがて生活の全体に建現して來る機微を詳細に御示し下さいました。信慧なき者を信知せしめ、苦界をこえて佛界に轉入せしめられるが故に地上活動の大轉換があらわれるのであります。

△那須行英師は、草も木も枯れ果てた野邊に蔭かれた實が、やがて春光に暖められて萌え出づる如く、常觀先生の慈訓が遂に心底に徹せられた實録を御送り下さいました。實の字の左訓に「カナラズモノノミトナルナリ」と葉人はお示し下されてあります。信仰の言葉というものは一度お聴きして何年かの後何十年かの後になつても必ず建現して來るもので決して消え失せることではありません。大切なことは實語に接することでありませぬ。

御住所、滋賀縣大上郡大漣村遠久寺

宗教小供新聞、十歳から十五歳までの方に相應した週聞新聞「光の子社」が昨年未から名古屋市中区門前町西別院に假事務所を置いて名古屋支局を作りました。御子様の宗教心を御育み頂く上に最上のものと信じますから御講讀をお勧めいたします。半ヶ年二四〇円、一ヶ年四〇〇円で郵税共であります。本社は神戸市生田区北長狹通四丁目一地産ビル内にあります。

(花田記)

昭和二十五年 一月十日 印刷  
昭和二十五年 一月十五日發行  
毎月一回十五日發行  
定價 一部金拾五圓(郵税共)  
一年分金百八拾圓(郵税共)

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九  
編集兼 花田あや  
發行人

名古屋市千種區千種町馬走二八  
印刷人 本 伍 郎  
名古屋市千種區千種町馬走二八  
印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和區内幸樂町二ノ二九  
花田正夫方  
發行所 慈光社  
振替口座番號 名古屋一〇四七〇番

慈光第二卷第一號 昭和二十五年一月十五日發行 (毎月一回十五日發行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可